

自由南アフリカの声

Voice of Free South Africa

1999年10月

No.21

発行 / アジア・アフリカと共に歩む会

Published by Together with Africa and Asia Association (TAAA)

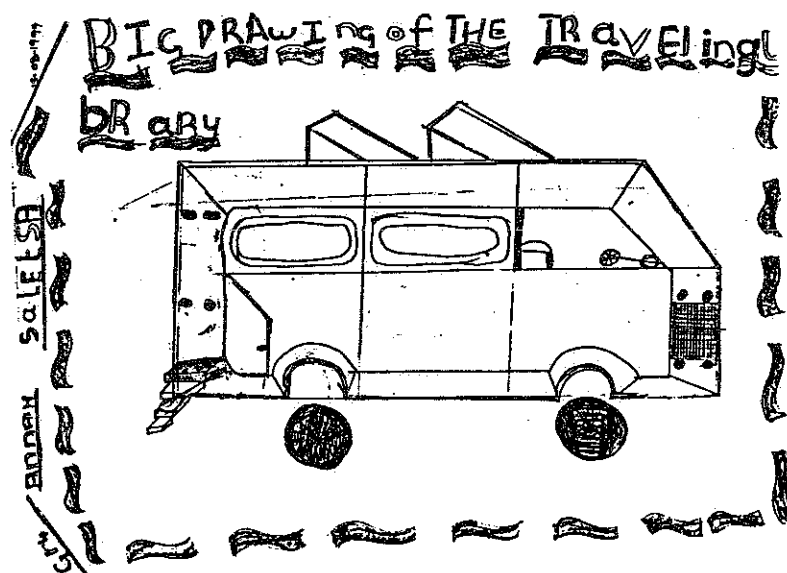
1999年10月の報告

- 7月にダーバンへ本 2,194 冊送付
- 7月に三郷より中古移動図書館車を入手
- 8月に ベノニへ 2,800 冊を送付
ピーターマリッツバーグへ 140 冊送付
ダーバンへ 1,187 冊と地球儀2個送付
- 9月に与野市にて講演会「アパルトヘイト終焉から5年」を開催
- これまでの本送付の合計 16万431冊

目次

移動学校図書館

-南アフリカの貧困地域における一つの可能性-	2
平成10年度会計報告	4
本の紹介「南アフリカ白人帝国の終焉」	5
岐阜新聞ほか（共同通信）記事	5
毎日新聞記事	6
南ア新聞記事	7



ハウテン州の子どもたちの絵より

移動学校図書館 —南アフリカの貧困地域における一つの可能性— その1

菊川 穰 (ユネスコ・プレトリア事務所 プログラムオフィサー)

マーガレット・グレーヤー (MEI 司書)

ブシ・ドラミニ (ハウテン州教育省図書館情報サービス部 次長)

ジューン・バージス (西ケープ州教育省図書館情報サービス部 メディアアドバイザー)

これまで、移動図書館に関しては持続可能性の観点から多くの疑問が投げかけられてきました。確かに、農村部等の僻地に住む住民に本に触れる機会を供給できるという点において、移動図書館の意義に疑問はありませんが、移動図書館を維持管理するためには、多くの人的そして物理的資源が必要なことが言われ続けてきました。このことは、あらゆる資源が貴重である発展途上国においては顕著であったと思われる。

ところが、南アフリカで、「アジア・アフリカと共に歩む会」(TAAA)によって実施されている移動学校図書館事業は非常に興味深く注目に値します。1992年以来、TAAAは15万冊もの図書を南アのカウンターパートに送っていますが、特にMEIのベントレイ代表の提案によって始まった、MEIをはじめとしたNGO (ELETとマシフンデス)から、ハウテン州教育省のような政府組織に送られた中古の移動図書館は既に7台を数えています。

もちろん、すべての移動図書館が問題もなく稼働しているわけではありません。例えば、サービスに対する需要は高かったにも関わらず、ダーバンをベースとするELETは、サービスの供給先であるクワズールナタール州の農村地帯における劣悪な道路状態のため事業を止めざるをえませんでした。また、さらに酷い状況なのは、ケープタウンをベースにするマシフンデスの場合で、一度維持管理費に関して責任を取ると言った事業実施先のセレス市とハルマナス市が政策を転換してしまい、寄贈された時以来、移動図書館車はそれぞれの市の駐車場に眠ったままになっています。

移動学校図書館事業が、アパルトヘイト時代には図書に一切触れる機会が無かったような貧困地域の学校の児童や教員達に、教材を届けられるほとんど唯一の手段であることも強調しておかなければなりません。事実、南ア中央政府教育省がまとめた、

「National Policy Framework for School Library」によると、移動図書館は一地域、もしくはコミュニティにおける一つの図書館というモデルに当てはまり、現在考えられる選択肢の中で最も実現可能性が高いと評価しています。また、より多くの質の高い教材をより多くの児童・生徒・教員に届けることは成果重視主義¹に基づいた批判精神のある生涯学習者を作り出す上でも、中央政府教育省において最も重要な課題であるのです。

今回の発表では、過去におけるポジティブな経験

と将来に関する希望がそれぞれの発表者により語られることとなります。グレーヤー女史はベノニ市における旧黒人居住区におけるMEIの努力と経験について、ドラミニ女史はハウテン州の農村地域の学校を主な対象とした活動について、バージス女史は西ケープ州教育省によるマシフンデスに寄贈されたバスを稼働させるための計画について紹介します。

(菊川)

MEIの場合

《背景》

MEIはアパルトヘイト時代に不利益を被ってきた学校における教育の質的改善活動の一環として読書の文化を促進する、という目的を持ってベノニ市で設立されたボランティア団体です。移動図書館車導入というアイデアは、TAAAからMEIを通してそれぞれの学校に寄贈された図書の多くが、それぞれの学校に図書館という概念がそもそも無いことや、適切な司書業務ができる教員がいないことなどによって利用されていない現状を憂慮して生まれてきました。

《理念》

多くの議論を経て、限られた資源を最大限に活用するために移動図書館という案が出てきました。なぜなら、1台の移動図書館は、1人の司書、そしてコンピューターを使える1人のアシスタントによって、3週間の貸出期限という条件のもと最大限15校の学校を訪問することができるのです。実際、15校それぞれに図書館を建設すれば、最低でも全体で7万5千冊の蔵書が必要ですが、移動図書館だと2万冊で済むことを思えば大きな経済的なメリットがあります。

《スタートアップ》

理念が具体化するまでには、慎重に事業計画を練る必要がありました。TAAAから移動図書館車を供給してもらえることが分かってから、まず図書館車の保管場所、図書はどのように整理され、発行されるべきか、基礎段階ではいくつの学校を対象とすべきか、またそれらの学校をどう選定するか、といった

¹ 成果重視型教育とは、現在南アにおいて導入されたばかりの新しいカリキュラムにおける中心概念で、子供中心主義に基づき、単なる学校内での試験の結果等に基づく評価ではなく、現実社会の中でのあらゆる状況において、児童自らが考え、判断できるようになることを(成果)目標とした世界でも最も革新的な教育理論である。

ことを解決しなければなりませんでした。基本的に計画実行のために必要な資源は、TAAAから寄付される移動図書館車、本と図書館車の保管場所建設費(120,000ランド)、図書分類、発行のためのラップトップコンピューター、プリンター、及び関連ソフトウェア(15,000ランド)、寄贈された図書の整理、分類経費(2,000ランド)、パートタイムの司書、ボランティアのスタッフ、そして情熱とやる気を持った学校でした。

また、効率よく図書館車を巡回させるためには、一度に乗せる図書の種類を揃える必要があること、大多数の寄贈された本が児童用であること、読書の文化を促進するためにはできるだけ早い段階から読書の機会を与える必要があること、小学校では1人の教員が1クラスを担当するため貸出状況を把握し易いこと等により、図書館車は当初は小学校に限って巡回することになりました。

パイロット事業は、計画のロジスティクスを確認する目的のもと、1校だけを対象に1997年の6月18日から実施されました。実施後1ヶ月以内には2校目も追加されましたが、当初はボランティアスタッフだけによる事業展開でした。しかし、3校目が加わった時点で、ボランティアスタッフだけでは今後の事業拡大が難しいと判断され、常勤の司書が採用されました。

《展開》

大多数が英語で書かれたフィクションもしくはノンフィクションのすべての図書と、移動図書館車はデブトンに建設された保管場所に収められており、図書館車はそこから毎回3,000冊ばかりを乗せて各学校に向かいます。学校に着くと、4人で1組になった教員がまず図書館車を訪れ、彼、彼女達のそれぞれの学級用に本を選びます。もちろん、子供達が自ら本を選べる状況が理想的なことは言うまでもありませんが、ロジスティクス上、1,300人もの子供たちが、1回の訪問で小さい図書館車を訪問することは不可能です。したがって、それぞれの教員が、まずは40から60冊ばかりの本を選び、それらを司書がバーコードとラップトップコンピューターを使いながら、貸出していきます。それぞれの教員達には、あらかじめ別々のバーコードカードが配られていますから、こうすることによって司書の仕事量を減らすことができます。よって、それぞれの教室には、先生によって選ばれた図書が常に用意されており、各教室の児童達は、いつでも好きな時に好きな図書を借りることができます。図書貸出カードを利用しているので、先生もMEIの司書もその子供が何を借りているのかは簡単に把握できます。

MEIの司書は常勤で、給与は賛同者の寄付によって成り立っているMEIの通常予算から捻出されていますが、非常勤のアシスタントは、セントアンドリュース学校財団によってまかなわれています。常勤

の司書は、MEIのボランティアスタッフの支援を得ながら、新しい本の登録、管理する責任者ですが、常勤、非常勤を問わず、2人の司書は各学校に図書館車が巡回した時は教員に対する効果的な図書選択に関する教育訓練も実施しています。

《現状》

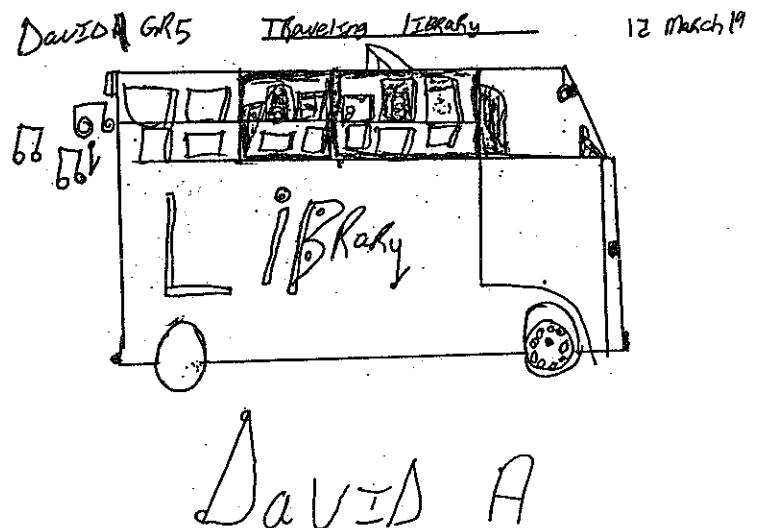
過去2年間の間に、移動図書館サービスは拡大し、現在7校もの学校を対象に図書館車は巡回しています。このことは、以前は読書の機会が無かった6,500人もの児童達に図書館サービスを供給していることを意味し、教員達に学習者の目的意識を高め、読書の文化を形成するための貴重な資源を供給していることでもあります。

常勤の司書の給与を除く経費はTAAA(郵政省のボランティア貯金を含む)からまかなわれています。これらの経費で、上述した通り15校まで巡回することができますが、それ以降に関しては、2台目の図書館車が必要になります。

《今後の事業拡大》

現在のところは約6,500人の児童を対象にサービスを供給していますが、デブトン地区には45,000人もの小学生がいるので、依然十分だとは言えない状態です。今後、サービスを拡大するにあたっての課題は、あらゆる方面から図書そのもの、もしくは図書を購入するための資金に関しての援助を受けているにも関わらず、依然図書の絶対量が不足していることと、1人の司書が仕事をこなす時間に限界があることです。

新しく訪問する学校を選定する基準は、その学校の校長をはじめとするスタッフの情熱と、学校の経営管理状況です。一度、新しい訪問校に選ばれると、担当者との接触に基づき、教員への啓発活動と共に巡回計画を立てることになります。



ハウテン州の子どものための絵より

《経験に基づいて》

過去2年間運営されてきました移動図書館プロジェクトの大枠については変更する必要はありませんが、細部に至っては検討の余地がある部分も出てきました。

《肯定的な側面》

- ・巡回システムは機能している
- ・教員の能力の向上—以前は図書館の使い方が良く分からず、児童達が自宅へ図書を持って帰ることについて躊躇していた教員達が、今では図書館を授業を効果的に進めるための情報原と捉え、貸出図書の選択に関して司書に特別な要求を出すほどにまでなっている。
- ・図書館車の訪問自体、児童や教員のみならず、地域の住民からも暖かく迎えられている。ある教員の話によれば、教室でのしつけ教育を、「悪いことをすると図書館へ行って本を借りてこないよ」といって実施している。
- ・家庭へ本を持ち帰ることによって、学校、そして児童達が保護者からより多くの支援を得られるようになっていきました。ある児童は、難しい本を持ち帰ったときなど、いかにして両親が助けてくれるかを喜んで話しています。
- ・巡回リストに加わっていない多くの学校から、リストに加えて欲しいとの希望があがってきています。

しかしながら問題点もあります。

- ・やはり児童達が直接図書館車を訪問できないという事実があります。
- ・1日あたり2校以上巡回しようと努力はしているものの、今のところは1日につき1校の状態です。
- ・図書館車のスペースが限られているため、視聴覚機材等は置くことができません。
- ・資金難のため司書の給与をいつまで保障できるか分かりません。

《将来》

MEIの移動図書館はまだ発展段階にあります。今までの活動より、移動図書館が、図書館が全くない地域へ図書を供給するための最も効果的かつ経済的な方法であることは事実ですし、今後は活動規模の拡大、そして他の事業者による他地域でのサービスの展開が望まれているのです。

しかし、移動図書館を運営するにあたって最も重要な司書の給与に関する問題が、本プロジェクトの将来を左右しかねません。個人や、団体からの寄付、善意だけでは、プロフェッショナルなサービスは維持できません。固定的な収入源の確保ことが、今後一番の課題になることでしょう。(그레이ヤー)

*続きは次号に掲載の予定です

平成10年度
「アジア・アフリカと共に歩む会」決算報告
(平成10年4月～平成11年3月)

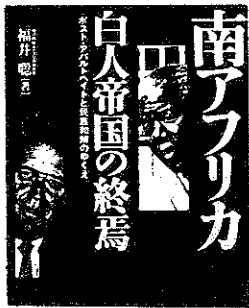
◆収入の部	
寄付金(個人からの寄付)	1,016,002
物品販売 (レイボスティ・書籍の販売)	31,060
講演料	20,000
郵政省配分金	3,759,000
埼玉県国際交流協会	565,000
利息(郵便局・銀行)	4,466
前年度繰越金 (平成9年度より)	3,845,169
計	9,240,697
◆支出の部	
本輸送費	627,065
通信費 (電話、FAX、切手、ハガキ等)	325,160
交通費	110,883
講演費(講演会会場費)	6,690
会議費	3,802
印刷費 (会報、案内の印刷、コピー)	122,155
事務費 (用紙、写真、封筒代等)	83,298
図書館車諸経費	215,842
現地活動援助費	2,894,000
現地視察費	644,489
雑費	25,892
計	5,059,276
差引残高	4,181,421
	平成11年度へ繰越

上記の通り報告いたします

平成11年3月25日

会計 吉田研子
会計監査 浅見克則

◆現在ユネスコでは識字教育に力を入れています。現地ユネスコ事務所の菊川さんは、今年TAAAのメンバーが南アを訪れて以来、移動図書館プロジェクトに積極的に取り組んでいらっしゃいます。



●本の紹介

『南アフリカ 白人帝国の終焉
；ポスト・アパルトヘイトと
民族和解のゆくえ』

福井 聡著 (第三書館)
定価 2,100円(税込)

「マンデラが神格化されすぎている」「選挙後の南アが人種融和の理想郷のように描かれている」。日本での南ア報道にそんな印象を持ったことはありませんか？

本や移動図書館を通じて南ア社会や人々との交流を続けているTAAAの皆さんの中には、日本での南ア像と実際の南アとのギャップに気付いてらっしゃる方が少なくないと思います。確かにマンデラは素晴らしい大統領でした。が、その象徴的な意味の下にすべてが理想化されてしまうのはおかしなことです。日本からあまりに遠く、実像が分かりにくい南アだからこそ、もっと率直に語られるべきものがあるはずだと考え、この本を出しました。

本書は主に、1990年から全人種選挙が実施されるまでの4年間とその後の1年間の南ア国内の動きを追っています。この間、私にとって一番印象的だったのは、選挙実施を引っ張った当時の大統領、

デクラークが、選挙後は南ア政界から消えて行ったことでした。どうしてそうなるのか。答えは簡単です。南アが黒人の国になったからです。ただ、黒人の国になれば白人は消えて行けば良いのかというのは私には大きな疑問でした。実は今担当しているユーゴスラビア・コソボ自治州のセルビア人も、南アの白人と少し近い立場にあります。社会はもちろん多数派が中心なのですが、新聞記者には少数派の動向が気になるものです。

本書では多数派黒人だけでなく、少数派白人がどうしたのかの点を含めて記録しました。皆さんが南アを考える上で参考にしていただければ幸いです。

福井 聡(毎日新聞ウィーン特派員)

《著者略歴》

◆1954年、名古屋市生まれ。1980年毎日新聞入社、甲府支局、東京社会部、外信部を経て90～93年にアフリカ特派員ハラレ支局長、93～95年に同ジョハネスバーク支局長。95年10月から外信部、97年4月から中部報道部副部長、99年5月からウィーン支局長。著作「アフリカの底流を読む」「新しい南アフリカ」「第三の開国」など。

◆福井聡さんとTAAAとの関わりは1994年にTAAAが南アを訪れた時から始まり、図書配布活動を取材し、記事を掲載、その後、南ア駐在の一年半、TAAAの活動に親身になって協力してくれました。

岐阜新聞(1999年7月12日・夕刊)ほか…共同通信の磯谷特派員が現地取材

世界の教室から

自前で本を蔵することができない貧困層が多いたまに南アフリカで、日本のボランティア団体から送られた中古バスと古い英語教科書や副読本などを活用した移動図書館が、子供たちの人気を呼んでいる。送られた本は、七年間で

日本の英語教科書活用

十五万冊以上。図書館を利用する旧黒人居住区の学校では、その英語副読本で試験をするなど、支援活動は日々の授業に必要不可欠となっている。

ヨハネスブルク郊外ペノニで、受け取った本の整理出しに当たっている司書のアリソン・ファンレンスバークさん(左)は、本の英語は平易で、英語が第二言語である子供たちにぴったり。移動図書館が子供と子供たちの人気がでまます」と絶賛している。



南ア

カと共に歩む会」(TAAA)の基地となっているデベトン小・中学校のエルファスアでは書庫」といって南ア関係者の指摘をきっかけに、一九九二年に始まった。当初は本だけを送っていたが、中古バスを入手できると、視教の生徒が一冊も船舶会社の好意では無しの教科書を共用することも

活動は、培料となったため、これまで玉野野市の野田千香子さん(左)が代表を務める「アシア・フリ

の学校には図書館があるが、黒人地区は遠く。だから、送られる本は生徒にとって非常に重要と評した。「眠れる森の美女」が好きという同校六年のチャールズ・ドラミニ(三)は「移動図書館は」とてもいい。なかつたら寂しい」と目を輝かせた。(ヨハネスブルク共同)磯谷直人

アパルトヘイトの傷、今も

早大生・千葉さん 南ア体験を報告

26日に与野



南アフリカの子供たちに囲まれた千葉さん

千葉さんは昨年7月から今年3月まで、大学を休学し、アメリカの非政府組織(NGO)スタッフとしてヨハネスブルクに滞在。働いていたエイズセンターでは、家庭内暴力が深刻なため、路上に生きている子どもたちも少なくない。子どもたちの精神的なケアを行った。子供たちに生活の基本ルールを教え、子供たちと自分自身を交わした。そこで、制度的には終わらせたもののアパルトヘイトの弊害を感じたという。子供たちは、互いの暴力に慣れ、路上に生かすにも差別を感じてきた。アパルトヘイトで吹き荒れた暴力の中で育ってきた人々にとって、人の命は極めて軽いものもあった。一方、南アフリカも

と過ごそうと、嫌気込みで乗り込んだ千葉さん自身も変わった。「黄色人種は黒人からは巨人と見られ、白人からは白人とは見られぬ。それに迫害も悪い。ソウシャルワークのつらさとして、真の高い仕事を提供するならば、精神衛生上、日本を往復する方がいい」と考へ始めた。千葉さんは講演で制度は終わったものの、気象は変化の中で言惑いでいる南アフリカの人たちにについて報告する。講演は、市民グループ「シ・アフリカを共に歩む会」(与野市大宮5)代表の野田千香子さんが、千葉さんと知り合ったことからは実現。回数は1992年の設立からこれまで、本が不足している南アフリカに中古の英語の本約16万冊、中古の移動図書館8台

南アフリカのヨハネスブルクを「ソーシャルワーク」として働いた東京都市立西上(現)国産大4年生千葉総子さん(23)が、26日に与野市で講演する。身近に感じとってきた「アパルトヘイト」を通じて「アパルトヘイト(種別差別)政策の終えんから5年が経過した今、その後の状況について語る。【中山 裕司】

暴力に苦しむ子らの現状訴え

会場は、26日午後2〜4時、与野市本町東の与野市コミュニティセンター第5会議室。参加費600円。問い合わせは野田さん(☎048・8332・8271)。

Words on wheels

Teacher's mobile libraries bring knowledge to rural children

NATALIE KAMMIES

A VETERAN English teacher on a mission to alleviate the plight of rural school pupils lacking books has won an international literacy prize for her travelling library project.

In the next few weeks Junie Baatjes will take her two mobile libraries to schools in far-flung areas of the Western Cape where pupils see relatively few books. Baatjes will squeeze two mini-libraries into two buses which will be rotated between schools.

This has become possible through winning the R16 000 Guust Van Wesemael Literacy prize two weeks ago, awarded by the International Federation of Library Associations.

School teachers will be able to order books from the library and keep them for three weeks before the bus collects them.

The buses, which were supplied by a Japanese aid group which also donated books, will be stationed at two depots in Grabouw and Tulbagh.

Each mobile library is able to hold about 5 000 books and will be equipped with a television and video recorder for educational programmes.

Baatjes also hopes to provide soup to schoolchildren as some only eat one meal a day.

Baatjes, who taught high school English for 25 years, has spent the past three years travelling thousands of kilometres for the education department trying to provide resources to rural schools.

She said the only books available at some schools were those belonging to teachers. At some schools the nearest library was 50km away.

"These children don't have access to books and don't know how to do projects or research independently," she said, adding that a lack of resources stunted children's mental growth and contributed to the high drop-out rate.

Unless children received books they would be left in a "time warp", unable to cope with the latest information technology, said Baatjes.

She also received R6 000 worth of books on winning the Unesco Books for Children Grant six months ago and this will help stock the libraries.

Baatjes' travelling libraries will initially go to two rural schools in the Grabouw area and four in Ceres.

"If I can at least bring them a cup of soup and a book, I feel I would have done something small," said Baatjes.



MOVEABLE FEAST: English teacher Junie Baatjes and one of her travelling libraries